



体育会名：関西学院大学体育会ソフトテニス部

創部年：1926年（大正15年）諸説ある

2025年度会員数：44人（4年12人、3年13人、2年11人、1年8人）

□同窓倶楽部名：関西学院大学体育会ソフトテニス部 OB・OG 会

* 関西学院同窓会 公認団体

□同窓倶楽部通称：なし

□設立年：不詳

□会員数：708人（男性592人、女性116人）

* 物故者含む

1929（昭和4）年4月に原田の森から上ヶ原へ学院が移転したため、軟式庭球部はコートに困り、仁川の堀田氏、近藤氏のコート进行借り受けていたが、30年5月、ようやく静修寮西側に新設コートができた。

倶楽部より準運動部へ、さらに運動部への正式入部は困難を極めたが、34年夏に早大との第1回早関定期戦（以後、早関戦と記す）が開催され、その後戦争及び新型コロナウイルスのため中止となった時期はあるものの、現在までこの定期戦は継続して開催されている。

そして36年になってついに認められた。同年6月29日開催の学生会総会で、満場一致により軟式庭球部は試練の準運動部から正式に運動部として編入を認められた。当時の松田勅主将は大講堂を圧する拍手の嵐の中で、先輩の悲願が成就したことに「感激で胸が一杯であった」と記している。36年の主な戦績は、全日本大学高専大会準優勝（沖野・池上）、第3回早稻田・関学定期戦勝利など。

37年は卒業生が多く、学院新聞に「沖野、山路、武内、高索、杉江、浜田、大島の7名を送る同部は一抹の不安があるが残留部員は池上を中心に全勝・関学のスローガンの下に連戦連勝を以って12年度を終始するであろう。」と掲載された通り、全関西学生選手権優勝（松田・池上）・準優勝（山本・土屋）、全日本大学高専大会優勝（松田・池上）などの結果を残した。

但し唯一、上京しての早大との定期戦では0-6で屈辱的な敗北を喫した。一人を残し宿舎に引揚げると同時に全員に丸刈りを申渡し、「当時の金で各人に50銭ずつ渡して早速丸坊主になって大阪に引揚げた」と松田勅主将は記している。

38～39年度は資料がないが、41年商経卒の泉川亀太郎主将が「私が昭和13（1938）年に取った関西大学高専の優勝カップや関西6大学リーグ戦の優勝旗や早稻田・関学定期戦のカップは昭和14（39）年度心ならず返上したことは誠に残念であった」と記している。

40年は全日本大学高専大会で高取・羽川組が3位入賞、43年には小橋・横山組が全関西学生選手権で優勝、全日本大学高専大会で準決勝に進出した。戦争の影響で同年秋をもって実質的に全ての球技スポーツが中止され、学生の徴兵延期の特典もなくなり、21歳以上の理工医科を除く全ての学生が12月1日にいわゆる学徒出陣として、校門から一斉に営門へと向かった。関学軟式庭球部から戦地に赴き、亡くなられたかたもいた。

45年の終戦直後から、軟式庭球部復活への懸命な努力が始まった。46年10月にはメンバーが足りず5組での試合となったものの、戦後復活第1回早稲田・関学定期戦（通算第11回）を学院の硬庭コートで開催するまでに復活。48年経済学部卒の藤原道明主将は「終戦後の混乱期に食べる事も満足に出来ず、コートを借り歩いて練習する場合の電車賃、試合に出場する場合の費用、新入部員の勧誘の為に旅行費用、その他費用にかかる事は全部と言ってよい程ご援助頂き、思う様に部の活動が出来、部の基礎が完成されたのは昭和18年卒の邑本登先輩の並々ならぬご指導ご鞭撻の賜物と言って過言ではない」と、邑本OBへの感謝の思いを記している。

戦後の混乱期を先輩方の援助と指導を受けながら乗り切り、51年には全盛時代を迎える。関西6大学リーグ戦で春・秋優勝、西日本大学対抗優勝、全日本選手権で服部・富永組が優勝、全日本学校対抗準優勝と好成績を残した。52年経済学部卒の立石重行は「その年敗れた試合は早関戦と全日本学校対抗だけである。因みに同年の全日本学生ランキングは1位服部・富永組、3位池田・立石組、6位六島・川口組と記憶して居ります。」と記している。

52年は関西6大学春・秋、西日本大学対抗、全日本学校対抗で優勝。53年は関西6大学秋、西日本大学対抗で優勝。54年は関西6大学春・秋、西日本大学対抗で優勝、同選手権でも六島・川口組が優勝を飾った。55年も西日本大学対抗で5連覇を果たした。56年は決勝で同志社に惜敗したが準優勝、関西6大学は春に優勝した。57年度は西日本大学対抗選手権を2年ぶりに奪回、全日本大学対抗選手権を悪戦苦闘の末5年ぶりに奪った。

59年度も奈良の橿原神宮外苑コートでの合宿でスタートしたが、参加人員は50人を超え、中でも4年生が20人以上を占めたのが珍しかった。関西6大学と、この年から始まった関西大学リーグ戦で優勝、関東の覇者法政との王座決定戦でも勝った。

60年は関学の誇る南、田中、中野、田中嶺二、飯井の後衛陣が一挙に戦列を離れるというマイナスを、4年生が一致団結して戦力第一主義を貫く山本審主将をよく支え、引き続き伝統を守った。春の1部リーグ戦に優勝し、王座戦は中央大に敗れ2位。西日本大学対抗は3位だったが、個人戦では1～3位を関学で独占、久々の快拳となり、東西対抗選手として関学から7人を送り出した。全日本大学対抗も決勝まで進んだが再度中央大に敗れ2位。秋の6大学も優勝し、王座に挑戦したが立教大に敗れ2位。早関戦も勝利し総合すれば近年にないよい戦績であった。

61年は前年度に王座戦、西日本大学対抗、全日本大学対抗といずれも優勝を逃していたので何がなんでも優勝を目指した。幸い主力選手が4年生であったのでこの点は心強かった。春の関西6大学リーグ戦、関西学生リーグ戦ともに優勝し、東西学生リーグ王座決定戦に上京したが昨年に続き中大に敗れた。西日本大学対抗3位、全日本大学対抗ベスト16、であったが西日本、全日本選手権では上田・富田組がともに優勝した。早関戦も6-0で完全勝利した。関西では絶対的に勝っていたのに前年に続き西日本、全日本、王座戦の大学対抗では優勝できなかった。東西対抗に西軍の主力選手として前年度に続いて7人出場した。秋の関西6大学リーグ戦、関西学生リーグ戦に共に優勝し、東西6大学王座決定戦を国立コートで法大と戦い優勝した。

62年は長年親しんできた図書館裏のコートが、教授研究室を建てるため撤去。新たに高等部南側に2面のテニスコートを作ってもらい、4月29日に堀部長、中島先生をはじめ、OB26人も出席してコート開きを行いスタートした。関西6大学春季リーグ戦、関西学生リーグ戦ともに優勝、東西学生リーグ王座決定戦は大阪府立体育館で日大に惜敗した。西日本大学対抗は同志社に完勝し、個人戦では上田・富田組が2連覇を達成、水野・宿南組も3位を獲得した。早関戦は新しいコートに早大を迎え、6-2で勝利した。全日本大学対抗は準々決勝で明大に敗れたものの、個人戦は上田・富田組が優勝、山田・永谷組が3位、更井・小林組がベスト8を獲得した。近時になく充実したメンバーを誇り、黄金期とまで言われて来たが、過去2回5年おきに獲得していた全日本団体のタイトルは獲得できなかった。

63年の関西6大学春季で優勝、個人は関西学生選手権で酒井・所組が準優勝、三井・小橋組がベスト4に入ったものの、その後はタイトルから遠ざかった。ようやく67年秋の関西学生リーグ戦で5年ぶりに優勝、西日本大学対抗は69年に7年ぶりの優勝を果たした。70年度は全日本大学対抗で準優勝、秋の関西学生リーグ戦でも優勝し、71年の天皇杯では楢原・岡田が3位に入った(優勝は68年卒業の小橋潤)。

その後は女子部が創設され、78年に関西学生リーグ戦に参戦し、82年に女子第1回早関戦に優勝し、90年春、第1回関西六大学個人戦でも隅谷・八尋組が優勝した。しかし、男女とも大きな実績を残すことが出来なかった。ただ、関西学生選手権単で男子田原が82年、83年の連覇を果たしことは明記しておきたい。

21世紀に入り、2005年春の関西学生リーグ戦で男子が35年ぶりに優勝。女子が初めて西日本大学対抗に優勝し、秋の関西学生リーグ戦でも優勝した。翌06年は男子が37年ぶりに西日本大学対抗で優勝し、秋の関西学生リーグ戦も優勝を果たした。女子は西日本選手権で中野・吉井組が複、屋地が単で優勝した。

07年、女子は西日本大学対抗で優勝し、西日本学生選手権単で屋地が優勝。同年以降、春秋の関西学生リーグ戦では11年まで、08年秋、09年春を除いて毎年優勝を続けた。09年は西日本選手権で今井・岡田真組が複で、七星が単で優勝した。11年は西日本大学対抗で優勝。複で今井・岡田博組、単も北川が優勝し西日本のタイトルを独占した。女子の全日本大学王座決定戦では、08年に優勝を遂げたが11年には惜しくも準優勝であった。

男子は09年西日本学生選手権で緒方・巽組が優勝、10年西日本学生選手権単で緒方が優勝を果たした。女子は北川が12年全日本学生選手権単で準優勝し、岡本が12、13年西日本学生選手権で単連覇、由田が13年に単準優勝を果たした。その中で、同じく13年に関西学生選手権複で岡本・西村組が準優勝、同単で岡本が13、14年に連覇を果たした。

15年に男子は春の関西学生リーグ戦、女子は秋の関西学生リーグ戦で、それぞれ優勝を果たした。同年女子の河浪が西日本学生選手権単および関西学生選手権単においてそれぞれ惜しくも準優勝であった。16年に女子は西日本学生選手権単で大森が優勝、関西学生インドアでは大森・竹田組が準優勝した。

17年に男子は西日本学生選手権複で雁金・中村組が優勝を果たす一方、18年に女子は秋の関西学生リーグ戦で優勝するとともに、大森・竹田組は関西学生選手権複で準優勝した。

19年に元号が平成から令和に変わった翌20年、新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい、日本全国で学生のほとんどの大会が中止となり、その影響は21年まで及んだ。そのような中で開催された関西学生選手権単で、女子福田が準優勝した。

22年、男子は西日本大学対抗優勝、関西学生選手権複で高木・田中組が優勝を

果たし、春の関西学生リーグ戦も優勝した。西日本大学対抗は23年に連覇し西日本学生選手権単で近藤が優勝、関西学生選手権複で岩崎・近藤組が、同単でも近藤が優勝した。近藤は24年にも関西学生選手権単で連覇を飾った。

一方、女子は関西学生選手権複で22年に木原・平岡組が準優勝、24年に藤井・宮前組が同じく準優勝した。

24年、女子は世界選手権複に宮前が出場し、続く皇后杯も出場し優勝を果たした。関学ソフトテニス部にとっては久々の快挙であった。関西学生リーグ戦においても2部で1位となり1部に復帰した。男子も秋の関西学生リーグ戦で優勝した。

25年男子は西日本学生大学対抗で優勝、同選手権複で神谷・中内組が準優勝、関西学生選手権複で小野田・酒井が優勝、同単では近藤が惜しくも準優勝となったが、春の関西学生リーグ戦においては優勝した。女子は関西学生選手権複で富永・奥山組が優勝、同複で高橋・村本組が準優勝を飾った。

ソフトテニス部 部史 編集担当者 丸尾照二（s46 法学部卒）

服部純子（s58 経済学部卒）